小野里　健太　　瀬戸　辰徳　　阿部　広彩

主題「よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒」の育成

1　主題設定の理由

中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ（2026）では、AI 時代に外国語を学ぶ本質的意義として、「言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと」と「自分の考えが磨かれて思考が深まり、人間関係が豊かになること」の２つの観点から整理している。こうした AI 時代だからこそ、多様な他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考えを伝え、相互理解を図ることのできる資質・能力の育成が、外国語教育に一層求められている。本校英語科では、このような外国語教育の方向性を踏まえ、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて表現方法や表現内容を工夫しながら、相互理解を図る言語活動を、系統的・継続的に実践し、英語科における探究的な学びを実現することで、外国人旅行者や移民の増加などの多様化する社会において、相手とよりよい人間関係を築くためのコミュニケーションを図る資質・能力を育成していきたい。

昨年度の研究において、生徒は、「Transable（AI を限定的に搭載した添削・翻訳ツール）」を英語の表現選択の支援として活用し、情報や考えを適切に伝える英語表現を選択・活用できるようになった。また、発信者と受信者の双方が相手意識を働かせ、単元の学びを構想することで、よりよい人間関係を築くコミュニケーションを行う資質・能力を高めることができた。一方で、言語活動で有効であった表現方法と表現内容の工夫が、次の単元や新たな目的や場面、状況等において意図的に活用されにくいという課題が見られた。そこで今年度は、振り返りを基点として学びを接続することで、生徒が自ら AAR サイクルを回し、よりエージェンシーを発揮することができるようにしていきたい。

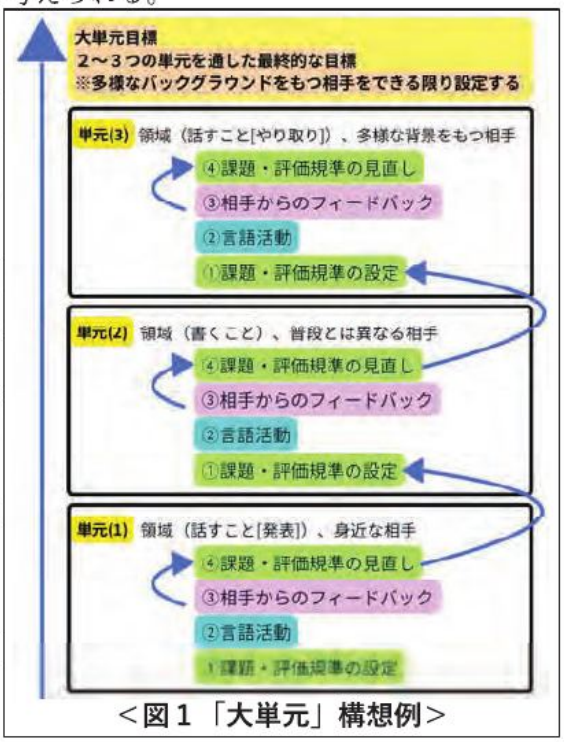
以上のことから、今年度も継続して研究主題を「よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

2　生徒がエージェンシーを発揮し、振り返りをもとに探究的な学びを深めるための手立て

(1)　単元間を接続し、学びをつなげ、深める「大単元」構想

昨年度の研究では、「附中 Can-Do シート ver.2（生徒が作成した単元の評価規準表）」を活用することで、生徒が相手意識を働かせながら学びを構想し、よりよい人間関係を築くコミュニケーションを行う資質・能力の向上につながった。一方で、単元内で有効であった表現方法と表現内容の工夫が、次の単元や新たな目的や場面、状況等で意図的に活用されにくいという課題も見られた。単元ごとに学びが完結し、単元間の接続が十分に図られていないことが一因と考えられる。

そこで今年度は、単元間の関連性を意図的に構成する「大単元」構想を取り入れる。具体的には、２～３単元を１つのまとまりとして捉え、それらを通して達成を目指す「大単元目標」を設定し、生徒にあらかじめ提示した上で各単元を構想する。大単元目標では、海外の学生や留学生との交流など、英語を使う必要感を強く感じられる相手とのコミュニケーションの場面をできる限り設定する。大単元目標に向かう各単元では、コミュニケーションの相手からのフィードバックを踏まえて、前単元の成果や課題を次単元に生かしながら、資質・能力を育成し、大単元目標の達成に向かう構造をつくる。例えば、単元(1)で単元目標に迫る言語活動を行った後、そのコミュニケーションの相手からのフィードバックを基に、自分が設定した単元(1)の課題や評価規準の妥当性、および言語活動の成果と課題を整理して振り返る。単元(2)では、単元(1)の振り返りを基に、自分で設定した単元(2)の課題や評価規準を見直し、更新する。これにより、大単元目標の達成に向けて、次単元の課題や評価規準がよりブラッシュアップされ、言語活動における表現方法と表現内容が更に深いものになるよ



＜図１「大単元」構想例＞

うに、試行錯誤を続けていくことができると期待される。

このように単元間の学びを接続する大単元構想を通して、単元ごとに学びが完結することなく、単元から得られた学びを振り返りながら、次単元の課題設定や評価規準の更新へと学びがつながり深まっていく。結果として、目的や場面、状況等に応じて表現方法と表現内容を試行錯誤し続けながら、よりよい人間関係を築くコミュニケーションを行う資質・能力を育成していくことができると考える。

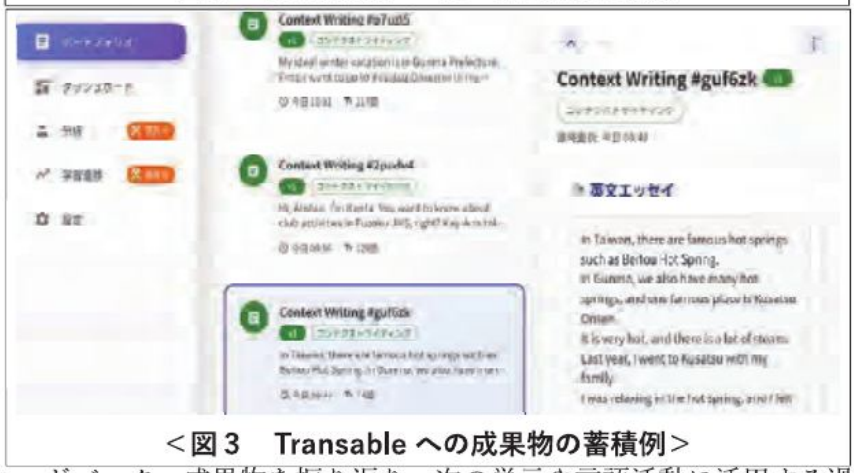
(2)　既習の有効な表現方法と表現内容を生かす Transable への蓄積機能の活用

昨年度の研究において、生徒は、Transable を英語の表現選択の支援として活用することで、英語表現の適切さが向上し、自分の情報や考えを適切に相手に伝える力が高まった。一方で、有効であった表現方法と表現内容の工夫を次の単元や言語活動で活用することが難しい生徒も見られた。

そこで今年度は、言語活動に、Transable に蓄積された英語表現やピアフィードバックの内容、過去の成果物（ライティングやスピーチの原稿）を振り返り、活用する活動を位置付ける。Transable では、英語表現やピアフィードバックの内容をその都度メモとして残すことや、成果物とそのフィードバックをポートフォリオ化することが可能である。生徒は、言語活動において、蓄積された英語表現やフィードバック等をそのまま用いるのではなく、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて適切な表現等を選択し直す。また、実際の言語活動で使用した結果として得られた相手からの反応やフィードバックを基に、表現方法や表現内容に試行錯誤を重ねながら修正・改善し、その過程や気付きを再び Transable に蓄積していく。



＜図２　Transable へのメモによる蓄積例＞



＜図３　Transable への成果物の蓄積例＞

このように、英語表現やピアフィードバック、成果物を振り返り、次の単元や言語活動に活用する過程を組み込むことで、生徒は前単元で有効であった表現方法と表現内容の工夫を資源として活用し、目的や場面、状況等に応じて試行錯誤しながら、コミュニケーションを行うことが期待される。これにより、相手とよりよい人間関係を築こうとエージェンシーを発揮し、表現方法や表現内容を継続的に改善し続けながら、コミュニケーションを図る資質・能力を高めることができると考える。

3　授業実践例

(1) 単元　　Lesson 8 Discover Japan

(2) 実施時期／学年／配当時間　　令和８年１月２６日(月)／１学年

(3) 単元の目標

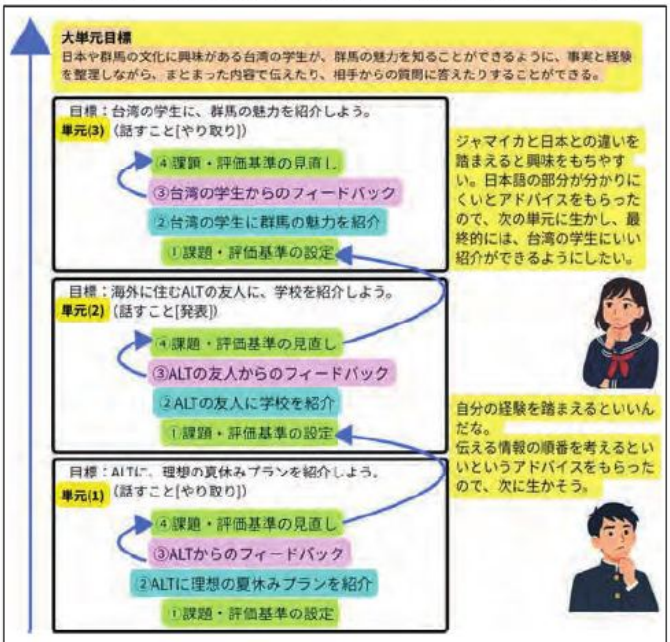
日本や群馬の文化に興味がある台湾の学生が、群馬の魅力を知ることができるように、事実と経験を整理しながら、まとまった内容で伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができる。

(4) 実践の概要

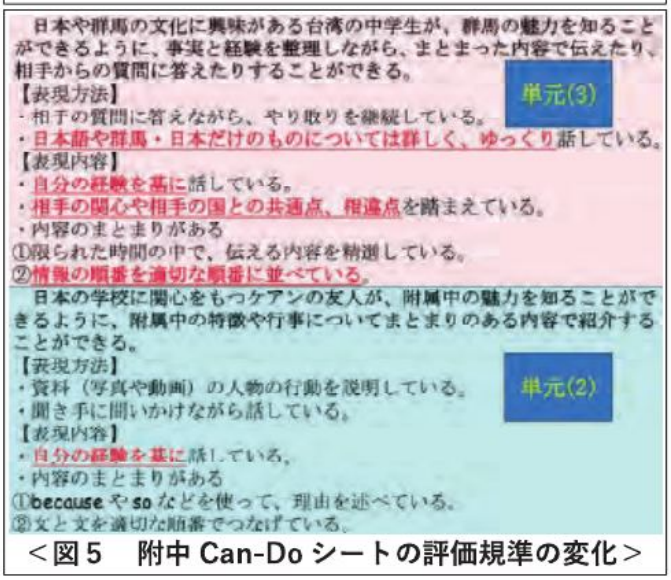
本実践では、大単元目標として、台湾の学生に群馬の魅力を紹介したり台湾の魅力について質問したりするオンライン交流活動を位置付け、単元(1)～(3)の学びをつなぎ、深める構想を行った（図４）。単元(1)では、「ALT に理想の夏休みプランを紹介する」活動を通して、「自分の経験を踏まえた方がよい」や「伝える情報の順番を工夫した方がよい」などのフィードバックを ALT からもらい、大単元目標の達成に必要な資質・能力を確認した。単元(2)では、「海外に住む ALT の友人に学校生活や行事、学校の特徴を紹介する」活動を行い、実際に ALT の友人からフィードバックを受けることで、相手の状況や多様な言語的・文化的背景をもつ他者の考え、経験等を踏まえながら自分の考えや情報を伝えることの重要

性を実感した。ALT や ALT の友人からは、「ジャマイカと日本との違いを踏まえると興味をもちやすい」「日本語の部分が分かりにくいので、説明を加えてほしい」といった助言を受けた。生徒はこれを基に、単元冒頭で自ら設定した課題や「附中 Can-Do シート ver.2」の評価規準を見直した。単元(3)の導入では、大単元目標の達成に向けて評価規準を再構成した。前単元の振り返りを踏まえ、「日本語や群馬・日本だけのものについては、詳しくゆっくり話す」「相手の興味や相手の国との共通点、相違点を踏まえる」などと相手意識を働かせ、相手の状況をより踏まえながらコミュニケーションを行う評価規準へと変化した（図５）。

単元(3)の追究の過程では、Transable に蓄積された英語表現やピアフィードバックの内容を活用しながら言語活動に取り組んだ。前単元で ALT から助言を受け蓄積していた「I hope you are interested in ～」という柔らかい表現を活用し、「I hope you are interested in Kusatsu Hot Spring.」と紹介の締めくくりに用いる生徒の姿が見られた。また、「日本語の部分は具体的に説明する」というメモを参考に、「温泉は説明が無くても伝わるかもしれないが、湯もみはそのままでは伝わらないと思うので、具体的な説明を加えた方がよい」と生徒同士で助言し合い、構成を工夫する様子も見られた。紹介後には、台湾の学生から、「湯もみについて具体的に教えてくれたおかげで、行ってみたいと思った」「台湾にある温泉を取り上げて紹介をしてくれたので、より親近感をもって紹介を聞くことができた。」「相手の国のことについて分からないことは、もっと質問をしたほうがよい。」といったフィードバックを受けた。生徒は、このフィードバックを活用し、本単元で自分が設定した課題や評価規準を再度見直し、次の単元へと学びをつなげていった。



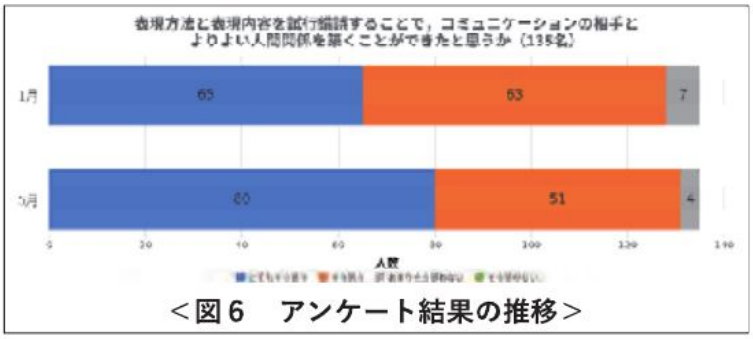
＜図４　本実践における大単元構想＞



＜図５　附中 Can-Do シートの評価規準の変化＞

4　研究の成果と課題

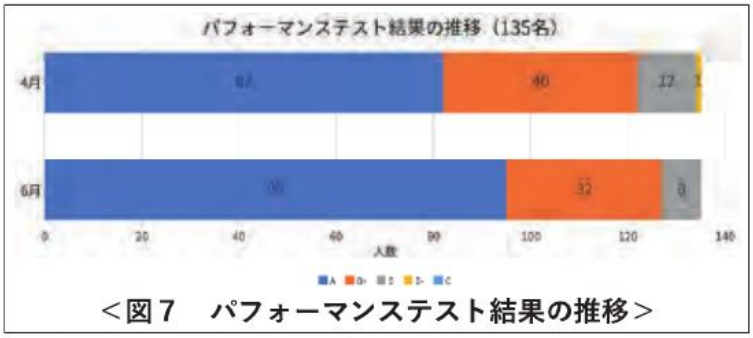
成果として、大単元目標を設定して、単元の学びをつなげる単元構想の工夫をすることで、生徒は前単元の学びを生かしながら表現方法と表現内容を工夫し、相手とよりよい人間関係を築くためのコミュニケーションを図る資質・能力を育成することができた。アンケート「表現方法と表現内容を試行錯誤することで、コミュニケーションの相手とよりよい人間関係を築くことができたと思うか」に対する同一生徒の回答について、符号付順位和検定を行なった結果、有意な差が認められた（p<.01、図６）。一方、令和８年度４月と６月に大単元目標の中の単元(1)と単元(2)の学習の成果として、話すこと（発表）におけるパフォーマンステスト（５段階評価）を同一の生徒集団を対象に検定を行なった結果、単元間での有意差は認められなかった。しかし、A 評価の生徒は 82 名から 95 名へ増加し、B 評価の生徒は減少した。４月時点で既に多くの生徒が高い評価を得ていたことを踏まえると，本実践を通して高い力を維持しながら，より多くの生徒が上位の評価へ到達したと捉えることができる。このことから、本実践を通して、生徒の意識面において有意な変容をもたらすとともに、



＜図６　アンケート結果の推移＞

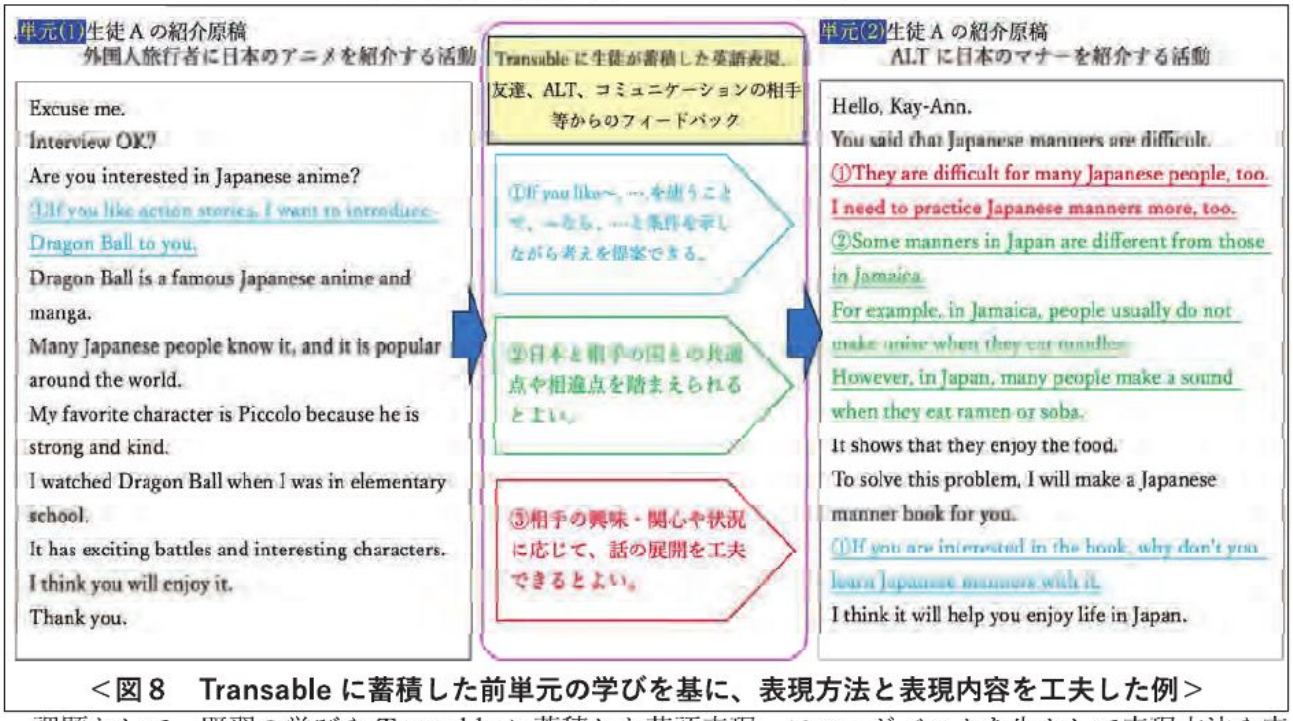
英語科

実際のコミュニケーションにおけるパフォーマンスでも、より高い水準を維持しながら上位層の拡大に寄与した可能性が示唆された（図７）。



＜図７　パフォーマンステスト結果の推移＞

また、生徒が単元(1)の学びを通して Transable に蓄積した英語表現や友達、ALT 等からのフィードバックを振り返り、単元(2)のコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて活用する姿が見られた（図８）。単元(1)の学びを基に表現方法と表現内容を見直し、改善しながらコミュニケーションを図る姿が見られたことから、蓄積した学びを振り返り、活用しながら、相手とよりよい人間関係を築くためのコミュニケーションを図る資質・能力を高めることができた。



＜図８　Transable に蓄積した前単元の学びを基に、表現方法と表現内容を工夫した例＞

課題として、既習の学びや Transable に蓄積した英語表現、フィードバックを生かして表現方法や表現内容を試行錯誤する姿が見られたからこそ、Transable が提示した表現や内容構成を、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に照らして吟味し、自分の言葉として再構成する力を一層高めていく必要がある点が挙げられる。多様な言語的・文化的背景をもつ他者との実際のコミュニケーションの場面を大単元目標として設定したことで、Transable が提示する表現や内容構成をそのまま用いるだけでは、相手の反応や言語的・文化的背景を踏まえた表現にはなりにくいことが見えてきた。AI 時代だからこそ、提示された表現や内容構成が本当に自分の伝えたいことを表しているか、相手との相互理解を深め、よりよい人間関係を築くことにつながるかを問い直し続けることを大切にしたい。

5　今後の展望

今後は、多様な言語的・文化的背景をもつ相手や新たな目的や場面、状況等においても、学びやフィードバックを生かしつつ、Transable が提示する表現や内容構成を吟味し、自分の思いや考えを自分の言葉で表現できるよう支援していきたい。そして、AI を活用しながらも相互理解を深め、よりよい人間関係を築くために、表現方法や表現内容を試行錯誤しながらコミュニケーションを図る資質・能力を育成していきたい。

＜参考文献＞

中央教育審議会（2026）第 13 回外国語ワーキンググループ『外国語 WG 取りまとめ案』.
群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』.
文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説　外国語編』,学校図書.
白井俊（2020）『OECD Education2030　プロジェクトが描く教育の未来』,ミネルヴァ書房.